

## 日・米・英・仏・独／教科書で学ぶ「国土とインフラ」

[第5回] イギリスの地理・歴史教科書から学ぶ②

### －ノルマン城郭(城壁)とイギリス人のインフラ観－

国土学アナリスト 森田 康夫

#### イギリスで育まれた「寛容な民主主義」

2014年10月19日の読売新聞朝刊第1面『地球を読む』に掲載された英国歴史家ポール・ケネディ氏の寄稿文「寛容な民主主義 相反する意見でも尊重」は、スコットランド独立に関する住民投票が政治混乱を引き起こすことなく、成熟したイギリス国民が凜とした態度を示したことを紹介しています。また、フランス革命とイギリス名譽革命の違いを例に、寛容な民主主義の価値を説いています。

#### 《寛容な民主主義(抜粋)》

スコットランド地方で分離独立の賛否を問う住民投票が行なわれ、反対派が勝利を収めた。スコットランド全域で何か月にもわたり議論が沸騰した。だが、暴動も、相手陣営のポスターを破る事件も、不正投票もなかった。そして何よりも、投票結果を拒否する者がいなかった。異なる見解と、相反する強固な信念。双方が持論を展開し、全員がそれを傾聴した。そして全員に、1票を投じる機会があった。

1789年、ケンブリッジ大学で学んでいた若き英国詩人ウィリアム・ワーズワースは、フランス革命の報を聞いた。フランス革命は……自由を愛するすべての人々にとって素晴らしい出来事だった。ワーズワースは学業を放棄し、新しい世界秩序の到来を自分の目で見るため、ドーバー海峡を渡りパリに入った。だが、事態は悪い方向に進んだ。暴徒が王のようにふるまっていた。各地でギロチンが使われ、死刑執行人が、恐怖政治の犠牲者の首を高々と掲げた。それは民主主義のかけらもない狂気と憎悪、政敵の無差別処刑だった。期待を裏切られ恐怖にかられたワーズワースは、フランスを逃げ出した。ドーバー海峡を渡り、英南部ケント州に上陸したワーズワースは、緑の草の上に倒れ込み、安堵のあまり大声を

上げた。もう安心だった。不当に投獄される事は無い。誰かに首をはねられる事も無い。

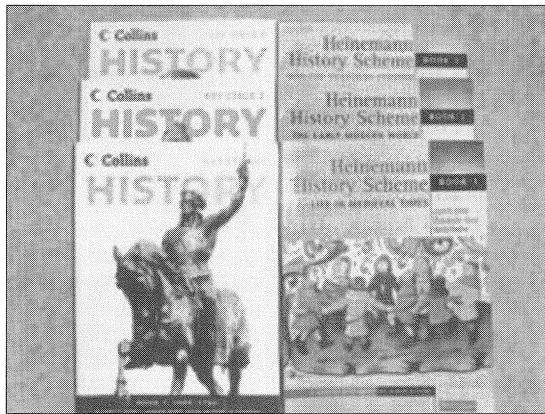
国王ジョージ3世統治下の、当時の英國は、現在のような議会制民主主義ではなかった。参政権は極めて限定され、公開のむち打ち刑が頻繁に行われ、植民地では奴隸制がはびこっていた。そしてカトリック教徒とユダヤ教徒には、市民権がなかった。だが、自分の考えを話す自由はあった。権威に対する批判は活発だった。

#### 実践的なイギリスの中學「歴史」教育

イギリス(イングランド)では、「地理」と「歴史」はKS3(キー・ステージ3:中学校)までが必修科目で、KS4(高校)は選択科目になっています。KS3の「歴史」では、3年間かけて「中世以降のイギリス史」を学習します。

歴史教科書の各単元の学習テーマは、その多くが「問いかけ」で始まっており、本文解説だけでなく、写真、絵画、肖像画、古文書、スケッチ、地図など多様で豊富な資料を活用しながら、①証拠(原典)に基づいて歴史上の諸問題について考える教育、②複数の解釈を比較・分類することにより物事を批判的に見る力を養う教育、③過去の意思決定や歴史事象を現在に当てはめて考える教育が展開されています。

例えば、ハイネマン社の教科書 “Heinemann History Scheme” では、「反乱(ワット・タイラーの乱)を起こした農民は今も英雄か?」という問いかけに対し、「反乱を起こした農民たちは当時の人々を驚かせただけでなく、現在の革新的な人々にとっての英雄にもなっている。人頭税は現在も紛争や暴動を引き起こす。マーガレット・サッチャーが



イギリスの中学校「歴史」教科書  
[Collins社とHeinemann社]

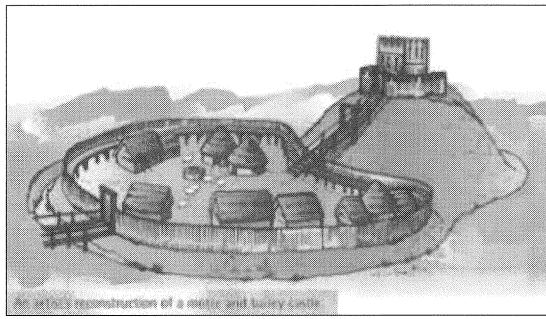
1989年・1990年に人頭税を導入した時、1500万人の国民が税金を納めなかつた。ロンドンでは歴史的大規模な反対デモが起きた。その6ヶ月後、サッチャーは英国首相、保守党党首を辞職する意向を表明した。人頭税がその理由の一つとなつた。」と、過去の教訓を現在に当てはめた(現在の実践につながる)考察を行つています。

#### ノルマン城郭(城壁)とインフラ観

インフラに関する記述では、教科書冒頭、ドーバー海峡を渡ってきたウィリアム1世が、現地イングランド人に対する防衛基盤として、またノルマン人の支配と統治を印象づけるシンボルとして、数多くの城郭を建設したことが取り上げられています。

前出のハイネマン社の教科書では、ウィリアム1世の時代の城郭は、木材と土で造られており、戦時の木製の塔が設置されている摺り鉢を伏せたような人工の小丘(モット)と、モットと連結した日常生活用の外郭空間(ベーリィ)とを組み合わせた「モット・ベーリィ城郭」と呼ばれる構造形式を採用。ベーリィの周囲にも高い木製壁や壕が巡らされていたとあります。また、ノルマン王朝の中期前後になると、石材を使用した「シェル・キープ(Shell Keep)城郭」への組み替えが進んだとも記述されており、イギリスの歴史における城郭(城壁)防御システムの位置づけ(重要性)が見て取れます。

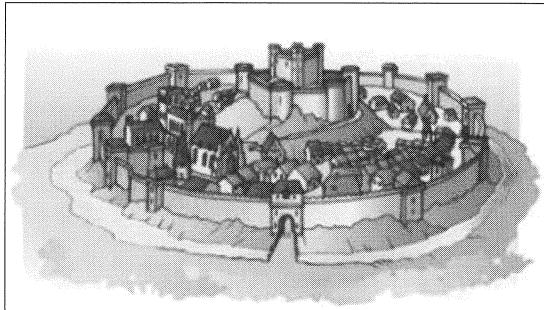
さらに、中世の歴史を通して、都市の防御・成長前提として城壁という装置インフラが不可欠であつたこと、また、狭い城壁内で生活する住民たちは、



「モット・ベーリィ城郭」の復元図 [Heinemann社]

暮らしの不便を受け入れながら、数多くのルール(制度インフラ)を守つて生活しなければならなかつたことが次の通り詳しく解説されています。都市城壁とその中で暮らす市民生活の歴史を学習することで、社会基盤形成や民主主義に関する理解・認識が深められます。

- ・11世紀～14世紀にかけて、都市はどんどん大きくなり、都市の数も増えた。都市は城壁(市壁: wall)で囲まれ、その中で食糧を育て、動物を飼育していた。
  - ・都市は売買のための場所であり、市場では、金品の交換が行われていた。
  - ・都市は一般的によく防衛されていた。これは、商人が金品の保護を要求したためで、都市は周囲を城壁で囲まれ、限定されたゲートにおいて、人の出入りはコントロールされていた。
  - ・ただ、時には部外者の侵入によって紛争が発生することもあり、中世を通してロンドンでは、イタリア人やフランス人、ベルギー人との紛争が発生していた。また12世紀には、ユダヤ人(宗教や文化が違うだけでなく、金貸しによって裕福になつた者もいた)との間で深刻な紛争が発生した。
  - ・都市は数多くのルール(都市を外敵から守り安全に保つためのルールと都市住民の生活を安全で公平なものとするためのルール)で満たされており、ルールを破った者は、法廷において処罰された。
- コリンズ社の教科書 “Collins KEY STAGE 3 HISTORY” では、ウィリアム1世の時代に100以上の城郭が建設されたという説明とともに、「モット・ベーリィ城郭」の復元図と城郭建設の適地に関する考察(見晴らしの良さ、城郭建設用木材・石材の供給適地、水壕用の水、防御のための河川の存在、

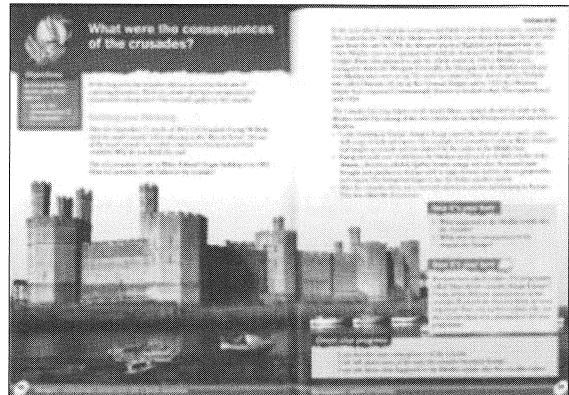


中世都市・ソールズベリーの復元図 [Heinemann社]

防御しやすい地形、城郭建設のための重労働力が得やすいこと等)が記述されています。また、「十字軍遠征の結果は何であったか?」というタイトルの見開きページでは、十字軍遠征の結果として、ヨーロッパの城郭形式が変わり、イスラムの同心円形式(城壁都市)が採用されることになったこと、その代表例として、十字軍に参加したエドワードI世によってカーナーヴォン城(Caernarfon Castle: 現在は世界遺産)が建設されたことが説明されています。

#### ドーバー海峡と日本海の違い

梅棹忠夫の『文明の生態史観』では、ともに、高度に文明が発達した「第一地域」に位置づけられているイギリスと日本。いずれも、海峡を隔てて大陸



十字軍の結果とカーナーヴォン城 [Collins社]

と対峙する島国ではありますが、イギリスでは、ノルマン・コンクエスト(ノルマン征服)以降も、城壁というインフラを整備してその中の生活を余儀なくされてきました。一方、日本では、有史以来、本格的な城壁をまったく必要としませんでした。ドーバー海峡の34キロに対する対馬海峡の海峡幅200キロ。この差は意外と大きく、イギリスと日本のインフラ観の違い、民主主義に対する経験値・価値観の違いにつながっている可能性があります。

【次回「大英帝国の礎を築いた交通インフラと  
鉄道エンジニア」につづく】